

帰国後、活躍する研修員

～グラハム・アグスティンさんの場合～

—アニメーション・フェスティバルで優秀作品に—

北海道海外技術研修員として平成16年度に来道し、学校法人北海道安達学園専門学校札幌デザイナー学院 アニメ・マンガ学科（現在の専門学校札幌マンガ・アニメ学院）で日本のアニメーションとマンガ制作を学び10か月間の技術研修を修了したグラハム・アグスティンさん（アルゼンチン）が、平成20年の春、4年ぶりに来道した。しかも、研修で習得した「アニメーション」の技術を母国において継続して活用し、SICAF*という国際的なアニメーションフェスティバル（*韓国で行われるアジア最大のマンガ&アニメーションの映画祭）で優秀作品として上映されたという朗報とともに、凱旋帰国(!?) さながらの来訪となった。



グラハム・アグスティンさん
（アルゼンチン）
平成16年度北海道海外技術研修員
（学）北海道安達学園専門学校
札幌デザイナー学院
アニメ・マンガ学科（当時）で研修

グラハムさんは1944年にアルゼンチンに移住した祖母の影響で幼い頃から日本文化に触れ、今や世界的にも人気の高い日本のマンガやアニメに次第に興味を持つようになった。その後、アルゼンチンの美術大学で絵を専攻し、デザインなどの仕事に従事した。そうした背景から、平成16年度にアニメーションの知識及び技術習得のため、研修員として来道した。当初は慣れない日本語での授業などに苦労したようだが、アルゼンチンですでに習得していた知識と経験を活用し、滞在中に短編のアニメーションを制作するという高い目標を早い段階で設定するなど、非常に意欲的な姿勢で研修に取り組んでいた。

アニメの短編を制作するとひとと言っても、短期間で完成できるものではないそうだ。当時の担当者の話によると、まず約5～6分間のストーリーを考え、キャラクターをデザインし、レイアウトも制作、さらに約3000枚前後の原画と100枚前後の背景画を描かなければならないという大変な作業を要するとのことだが、グラハムさんはこの気の遠くなるような作業を粘り強く続け、研修の最後には目標通り短編アニメーション作品の制作を成し遂げた。が、実は、彼の制作活動はこれで終わったわけではなかった。さらに完成度の高い作品に仕上げるため、帰国後、約3年の年月をかけてさらなる作業を進めていたのだ。その作業の間には、フリーランスのデザイナーとしてアルゼンチンのみならずアメリカなどの会社の広告デザインや絵コンテの仕事も抱え忙しい日々を過ごしていたが、途中で投げ出すことなく、地道に制作活動を続け、母国アルゼンチンの地で完成まで導くことができた。

グラハムさんの真摯な姿勢と熱意によって作り上げられた作品の名は「fear」。その作品が海外の様々なアニメーションフェスティバルで上映され、今や世界を舞台に活躍をしているグラハムさん。今回の来道期間中に、4年前に研修先としてお世話になった専門学校札幌マンガ・アニメ学院では学内の大ホールで上映会を開催。グラハムさんの作品と意欲あふれるその姿勢が、日本の学生に大きな刺激を与えていた。

はるか南米の彼方、多岐にわたる分野での日系青年の人材育成に貢献し、北海道と南米を繋ぐことを目指して、北方圏センターは海外技術研修員受入事業



作品のポスター



作品の一場面から